

## ひろばに集う喜び—第6回ひとはく「共生のひろば」

岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館 館長）

2月11日は共生のひろばの日です。この日に当たる他の予定は、この行事のためにすべて吹っ飛ばされてしまいます。ひろばに集まって下さった皆さん方にとってこの日はいかがだったでしょうか。その日の熱さを、この冊子で、何かの都合で集まれなかった人々に伝えることができるでしょうか。

6回目ともなると、準備する裏方も、参加して発表し、発言する側の人たちも、ひろばに合わせた要領を習得し、タイトに組まれた時間割も淡々と消化されました。ポスター発表との時間割の関係から、16に制限された口頭発表も、ほとんどはよく準備され、時間厳守で進行しました。



この場で何度も発表され、場慣れをした発表者も、はじめてでおっかなびっくりで取り組まれていた発表者も、自分の科学的好奇心に従って学んだ成果を、これぞ学ぶ喜びなりと、楽しそうに紹介して下さいました。聴衆の側も、自分が学ぶ喜びと発表者のそれとを比べながら、楽しみを分かち合っておられる様子が、質疑応答などからも読み取れるようでした。発表する人の楽しそうな振る舞いも、発表はしなくても質問によってひろばへの参画を確かめていた人たちも、ひろば一杯にひろがる知的好奇心を満喫しながら過ごすひとときを共有できたのではなかったでしょうか。

発表の技術に巧拙はあります。しかし、語る内容が伝わるのは上手な発表だけではありません。もちろん、よく準備され、上手に語られる発表は、受け取る側にも分かりやすく響いてきます。しかし、訥々とした発表でも、学ぶ喜びが満載されているものには自然に惹き付けられるものです。生涯学習は理屈ではなく、まず取り組むことです。自分の知的好奇心に従って学びを始め、学んだ成果をできるだけ多くの人と共有しようとするのです。共生のひろばがそのための舞台になることを期待します。

実際にひろばに参加できた人たちは、学ぶ喜びを共有できたと思いますが、博物館としては、そのような喜びの環を、さらに拡げる役割を担っています。楽しみ方を知った人たちの協力を得て、この輪を拡げる活動にいっそう力を入れたいものとあらためて思ったことでした。

今年も学校関係の発表が目立ち、優れた事例がいくつもありました。表彰の対象となった発表にも、何件か学校団体が含まれました。博学協働は、今では国も力を入れる課題ですが、ひとはくでは以前からこの課題に積極的に取り組んでおり、意欲的な先生方の自主的な研修の機会をつくったり、実際に学校団体の行事等にも協力してきました。昨年、「ひとはくいきものかわらばん」を募集したところ、818点もの応募がありましたが、児童生徒の諸君からこんなに注目をいただいたということは嬉しい驚きでした。ひとはくの博学協働の活動は、優れた先生方の協力のもとに、健全に展開しているものと自負しています。共生のひろばで、小学校から高等学校まで、多様な発表が聞けるのも、その成果の一環かと誇らしく思います。

博学協働の成果は学校を通じての連帯だけでなく、若い世代に自然への関心を喚ぶお手伝いにもつながっています。いくつかの連携グループなど、積極的な児童生徒の参加が目立ちます。自然と真摯に向き合う若者が増えるように、わたしたちの活動を展開していく必要があります。聞くところでは、連携グループに属する生徒の中に、難関といわれる大学に合格してい

る人もあるそうです。課外活動をしておれば受験に不利だなどという俗説は、今でも正確ではないように思います。現に、共生のひろばで発表している若い人たちのいきいきした表情に接していると、彼らが生きている喜びを満喫している様子がダイレクトに伝わってきます。

口頭発表で、特徴的な2件に今年は気づきました。発表者は、どういう団体に所属しているかを明らかにして発表するのが通例ですが、今年の口頭発表で、1件だけ所属団体なしの発表がありました。河井さんの「我が家はたぬき御殿」でした。防犯カメラを利用して河井邸に群がる野生動物たちの行動を記録したユニークな発表でしたが、発表者の所属も突き詰めれば「河井一家」でした。日常生活の中で、家族の皆さんがいっしょに野生動物と共生しておられる様子がまざまざと示されていました。たまたま、今年の河合雅雄名誉館長の基調講演では、日本人と野生動物の共生とは何かを明確に描き出していただいております。その内容を具体化するような事実を、同じ篠山の河井さん（漢字は違っていました！）が発表されたという巡り合わせがいっそう愉快でした。この発表は見事に名誉館長賞に輝きました。

もう1件は、大阪ガス姫路製造所の参加を得たことでした。この年度の生物多様性条約締約国会議（COP10）の影響がどのように表れるか、密かに関心をもっていました。COP10を機に盛り上がっている企業の生物多様性への関心が、共生のひろばにもはっきり刻み込まれていることを嬉しく思いました。この発表も、ポスターの方で審査員特別賞に選ばれました。今後企業からの参加の輪もさらに広がることをおおいに期待させていただきます。

ポスター発表も、一昨年から、2月11日だけでなく、その後しばらく企画展示室で公開を続けることになっています。今年も力作36点が、共生のひろば当日には参加できなかった人たちにも見ていただけました。口頭発表の内容をポスターでも出展していただいている作品もいくつかありました。口頭発表は聞いていただける人には強く訴えますが、発表当日の12分だけです。それに対して、ポスターは、見る人に理解する努力を期待しますが、長期間展示されます。それぞれに訴えかける力に違いがありますので、発表者の取り組みも異なってきます。実際、ポスターの作り方もさまざまです。

口頭発表には発表を準備する楽しみもともなうのですが、ポスターには表現の方法に独創性を見出す喜びがあるようです。同じ内容を伝えるにしても、表現方法によって伝わり方が違ってきます。文字を並べ、絵を描き、さらに伝えるための造形に工夫を凝らし、展示物の大きさにまで念が入っているものがあります。じっくり読みたい作品、パッと見ただけで思わず微笑んでしまう作品、力が入っていることがしみじみと伝わってくる作品、それぞれに見る側に訴えてきますが、訴えようという意欲が磨かれてくるのも楽しみです。

2月11日に限っては、ポスター発表者の説明を聞く機会がありました。発表者と直に語り合って、展示だけでは読み取れない背景まで説明を聞くことで、内容により深く理解ができました。ここでも、もう何度か参加して下さっている発表者もありますし、今年はずっと、という方もありました。

6回目ともなると、共生のひろばにはおなじみの参加者が増えてき、新たな参加者がどちらかというところ少数派になっています。もちろん、館員がお手伝いしながら日常活動を展開し、連携の環を拡げている事例が多いのですから、毎年新規参加者がたくさんあると期待できるものではありません。しかし、博物館が支援し、知的好奇心に基づく学ぶ喜びに生き甲斐を見出す人たちの輪を拡げることが、今ほど日本の社会で期待されているときにはないような気がします。そのうちに、などとのんびりしたことをいっていないで、日本と日本人が健全に生きているすがたが未来に確か



に引き継がれるように、共生のひろばを豊かにするような活動が展開されることが期待されています。

毎年寒さのきびしい季節に開く共生のひろばですが、6回目はとりわけ寒い日に当たり、三田も雪景色が広がっていました。事前に申し込んでおられた方のうちに、寒さに驚いてでしょうか、参加を見合わせた人たちも少なくありませんでした。しかし、2月11日という日付けはしばらく変えないで続けたいと考えています。来年の2月11日もひとはくのホテルが、学ぶ歓びに酔う人たちの熱気に包まれる1日であることを期待します。それが1日だけの一過性の歓びで終わるのではなくて、その日に備えて1年間の日常的な学びが積み重ねられていくようでありたいものです。



ポスター発表会場の様子